

フランクル『心理学者、強制収容所を体験する』5回連続講義、第4回目

苦悩と宗教の問題

日本ロゴセラピー&実存分析研究所・仙台 研究所内 2009年8月18日 19:00~21:00

安井 猛

1章 宗教において何が問題になるか？

宗教、これは重要であると同時に困難な問題です。私は子供の頃から宗教の問題と関わってきて、現在大学で宗教学を教えています。これはそうなると思ってなったのではなくて、一生懸命問題と関わるうちに自然にそうなってしまった。知らないうちに趣味から職業を引き出したという感じです。どのような成り行きによってそうなったかをお話するときと興味深いことがあるかもしれないとは思いますが、ここではフランクルとともに「苦悩と宗教の問題」を理解するために必要と思われることだけをお話します。

皆さんはどのように宗教を理解していますか？まず、お寺や神社または教会などを思い浮かべましょう。既成教団、歴史の浅い教団。そしてこれらの教団に集まる信者さんたちがいます。宗教行事があり、聖職者たちの講話や説教があり、信者の交わりがあります。社会奉仕また政治的な活動も出てきます。すべてこれらの活動は宗教だといってよい。人間はひとりで生きられない。複数で生きていく。しかし、例えば家族があっても、それがどの程度自分の心の拠り所となるかはよくわかりません。血縁関係は人間にとって不可避の関係ですし、人間を助けますが、しかし、この関係はいつもよく機能するとはかぎりません。家庭の中で人生の意味とか価値とか目標がはっきりしないことがあります。さらにまた家族という血縁関係はそれだけであるわけでもありません。それはそれを超えた共同体、地域とか国の政治につながっています。経済活動も会社勤めとか自営業とかでは事情が異なります。世代の関係も流動的で、子供はいつまでも家に居続けるわけにはいきません。家の伝統があり、それは時代ともに育ったものであり、偏っていることはまれではありません。家族はその時々からのプレッシャーを受けて、それぞれの成員が必ずしも家の伝統に満足しているわけではありません。どこにどう向かっていけばよいのか分からなくなる。生活の方向に確かなものがなくなる。だから争いが絶えなくなる。貧困があり、今日のように不況が続くと生活が落ち込みます。病気があり、それが治らないこともあります。死の脅威があります。貧と争と病と死は密接に宗教と関わります。それはこれらの苦しみからの出口を提供すると考えられるからです。

もちろん、貧しさ争いと病気と死をとくに宗教と関わることなしに克服する人々もいます。彼らは人生の苦難を経験するのですけれども、それはどのような形であっても解決可能なのだとします。この立場は多くの人々の立場でもあります。私は日本の宗教の歴史を研究したり、それを教えたりしています。最近、宮本武蔵の書物を読んで彼の言葉を学生に伝える機会がありました。彼は自分に厳しい人だったらしく、62歳で亡くなる1週間前に遺言に相当する21の短文を遺しました。そのなかで贅沢するなとか、宝物を持つなと

か、世の中に尽くせとか、恋をするとか、実際的なことを書いています。宗教についても面白いことを書いています。「仏神は貴し、仏神をたのみず」とあります。仏や神があることはいいことだ、しかしそれに頼むわけにいかない。自分のことは自分で片づけようという意味です。武士は死と向き合い、それを仕事とします。自分だけが頼りだから、ただひたすら死ぬことへ飛び込んでいく。仏神はせいぜい貴ぶだけでよろしい。それから先のこととはただ自分のすることがあるのみだ、といいます。21 個の句は『独行道』というタイトルのもとに集められています。たった 1 人で道を行く！生きるにも、死ぬにも「ただ 1 人」という自分自身に対する厳しさは現代人をひきつけるのですね。他人とつるんで安心するという生き方もあるのですが、私個人としてはそのような生き方、死に方はあまり好きではないので、武蔵に惹かれる部分があります。生死に関してはいろいろあって、きっとどれが一層よいというのではないのかもしれませんが。仏神を語る宗教がある。他方、自己だけを語る宗教があります。この 2 種類の宗教の間に宗教の様々なバリエーションが出てくるのでしょうか。人はどの時代にどのような社会や家族の中に生まれるかを選んだわけではありません。気がついてみたら、日本だとか他の国だとか、この家族だとかあの家族だとかに生まれたということです。宗教も大体は生まれた時から決まっています、それについてはどうしようもありません。普通、我々は、「自分は無宗教だ」といったりしますが、それは例えば寺院や神社や教会と直接結びついていない、あるいは聖書や経典を読む習慣がないというだけのことであって、実は意識的無意識的には我々の生まれ育った地域や家族の宗教に接しています。宗教とは人生にどう向き合うか、人生の中、世の中にどのように入っているかという、世の中におけるあり方の問題であって、この問題と無関係に人は一日たりとも生きることはできません。この問題があるところにはかならず、目に見える宗教の形もあるのです。

2 章 被收容者には宗教が問題だった。

それでは فرانクルの描く強制收容所において被收容者はどのような形で宗教を生きただろうか？被收容者の関心事はいつ強制收容所を出られるか、それまでどう生き延びようかという問題でした。それを超える精神的な問題は影をひそめ、高次の関心は引っ込んだというのが実情でした。しかし、フランクルによると、例外は 2 つありました。1 つは政治への関心、もう 1 つは宗教への関心でした。フランクルは特に新入りの被收容者の宗教的感性のみずみずしさや深さは感動的だったと述べています。「とりわけ感動したのは、居住棟の片隅で、あるいは作業を終え、ぐっしょりと水がしみこんだぼろをまとって、くたびれ、腹を空かせ、凍えながら、遠い現場から收容所へと送り返される時に、閉め切られた家畜用貨車の闇の中で経験する、ささやかな祈りや礼拝だった」と。このように祈りと礼拝は厳しい労働と疲労と空腹に結びついていました。フランクルはさらに譫妄に苦しめられていた発疹チフス患者の宗教性に触れています。「仲間の一人が関しなければならなかった譫妄のむごさを、いまだかつてわたしは知らない。その仲間は発疹チフスで高熱を発

し、死期が近いことを悟って祈ろうとしてのだが、高熱が引き起こす譫妄のために、祈りの言葉が出てこなかったのだ…」譫妄というのは錯覚や幻覚が多く、軽度の意識障害が伴う状態のことですが、このような状態にあっても、迫りくる死に備えて祈ろうとしたというのです。人間の精神はしたたかなものであることを知らされます。人間に何か真実なものがあるとすれば、それはこのような状態を克服しようとする意志のことだと思知らされます。宗教性は病と死を克服しようとする意志とかかわる ということができます。

さらにフランクは降霊術をする人々の集まりに招かれた経験にも言及しています。彼自身は降霊術を信じてはいなかったのですが、彼が心理学の専門家であることを知っていた医師が「秘密の集会」に招いたのでした。フランクはそこに居合わせていわゆる降霊術なるものを経験したのですが、彼は「霊」といわれるものは「下意識の精神」のことだと解説しています。彼はこの集りを思い出しながら、それを「収容所でも、たまには知的な議論が交わされた」事例として理解しました。

フランクはさらに「内面への逃避」と呼ぶ宗教性に言及しています。強制収容所では環境に働きかけてそれを変えることはできませんでした。環境に個性的な何かを付加する可能性は閉ざされていました。この状況にあって自分を保持する唯一の道は外に気づかれないように注意しながら、内へ向かうこと、内面的に深まることでした。被収容者の中でも、もともと精神的な生活を営んでいた感受性の強い人びとは収容所生活という困難な外的状況に苦しみながらも、精神にそれほどダメージを受けないことはあったといえます。「そうした人々には、おぞましい世界から遠ざかり、精神の自由の国、豊かな内面へと立ち戻る道が開けていた」身体的拘束と労働の搾取からくる苦しみに耐えるためには身体的な強靭さが必要だと考えがちですが、これは必ずしもそうではなかった。そのような苦しみに耐えるためにはむしろ「精神の自由の国、豊かな内面へと立ち戻る道」を選ぶことができることが必要だったといえます。それでは、そのような道を選んだ人々は具体的にどのような経験をしたのだろうか？フランクは自分自身の経験に即してそれを説明します。

強制収容所から工事現場へ向かうときのこと、隣を歩いていた仲間が、不意につぶやいた、「ね、君、女房たちがおれたちのこのありさまを見たらどう思うだろうね…！女房たちの収容所暮らしはもっとましだといいいんだが。おれたちがどんなことになっているか、知らないでいてくれることを願うよ」この言葉を聞いたフランクに何かが起こった。彼は書いています、「そのとき、わたしは妻の姿をまざまざと見た！」と。何キロもの道を歩きながら、彼は「妻と語っているような気がした。妻が答えるのが聞こえ、ほほ笑むのが見えた。まなざしでうながし、励ますのが見えた。妻がここにおようがいが、そのほほ笑みは、たった今昇ってきた太陽よりも明るくわたしを照らした。… 愛は人が人として到達できる究極にして最高のものだ。… 愛により、愛の中へと救われること！人は、この世にもはやなにも残されていなくても、心の奥底で愛する人の面影に思いを凝らせば、ほんのいつときにせよ至福の境地になれるということ、わたしは理解したのだ。… わ

たしが問いかけると、妻は答えた。妻が問えば、私が答えた。」このような語らいは彼が仕事をしているあいだ中も続きました。ふと、フランクは彼の妻がまだ生きているかどうか分からないではないかと思った。しかし、彼は続けます、「わたしは知り、学んだのだ。愛は生身の人間の存在とはほとんど関係なく、愛する妻の精神的な存在、つまり（哲学者のいう）『本質』に深くかかわっている、ということ。愛する妻の『現存』、私とともにあること、肉体が存在すること、生きてあることは、まったく問題の外なのだ。愛する妻がまだ生きているのか、あるいはもう生きてはいないのか、まるでわからなかった。知るすべがなかった… だが、そんなことはこの瞬間、なぜかどうでもよかった。愛する妻が生きているのか死んでいるのかは、わからなくてもまったくどうでもいい。それはいっこうに、私の愛の、愛する妻への思いの、愛する妻の姿を心の中に見つめることの妨げにはならなかった」これはフランクの作品のなかで感動的な部分の1つですが、彼は妻の身体的な現存とは別な、彼女の精神的な本質が決定的なことだったというのです。彼はこの精神的な意味での妻を「まざまざと見た」。このことと彼が強制収容所を生き延びたこととは1つのことだった。このようなことはあるのですね。愛する人がいること、彼女あるいは彼を愛すること、本当に深く愛すること、このことが苦境を生き延びさせることができるということはあるのですね。このことはもっともっと考えてみなければならないことですね。

フランクはさらに「過去の体験に立ち返る」ことも「内面の生を独特な徴」で満たすことができたといいます。それは世界と現在の生活を忘れさせてくれた。彼はまた、収容者の内面が深まると、自然と接することは強烈な体験となったともいいます。日没信仰というものは日本人にもありますが、フランクは日没の光景が被収容者たちの心を魅了したといっています。しかも4つの例をあげています。それほど彼はこの経験が印象的だったようです。その中から1つだけここに取り次いでおきます。

「そしてわたしたちは、暗く燃え上がる雲におおわれた西の空を眺め、地平線一杯に、鉄（くろがね）色から血のように輝く赤まで、この世のものとも思えない色合いで絶えずさまざまに幻想的な形を変えていく雲を眺めた。その下には、それとは対照的に、収容所の殺伐とした灰色の棟の群れとぬかるんだ点呼場が広がり、水たまりは燃えるような天空を映していた。わたしたちは数分間、言葉もなく心を奪われていたが、だれかが言った。『世界はどうしてこんなに美しいんだ！』」

このような自然体験は、愛する妻との体験、また詩や芸術や音楽、そして「毎日、義務として最低一つは」言うことに決めたユーモアと同じように、みじめで、無意味で、暗い現実から距離をとることを可能にしたといいます。すべてそれらは宗教と同じように、越えることのできない現実、そしてその中の自分から距離を保つ手段だったといえます。

最後に、フランクの宗教観に関する言葉で、避けて通れない箇所はなんととっても

『心理学者、強制収容所を体験する』の結びです。これを紹介しようと思いますが、これは同時に、収容所から解放されたあと元被収容者はどのような心理的経験をするのかをフランクルが説明する文章の結びでもあります。

「そしていつか、解放された人々が強制収容所のすべての体験を振り返り、奇妙な感覚に襲われる日がやってくる。収容所の日々が要請したあれらすべてのことに、どうして耐え忍ぶことができたのか、われながらさっぱりわからないのだ。そして、人生には、すべてがすばらしい夢のように思われる 1 日（もちろん自由な 1 日だ）があるように、収容所で体験したすべてはただの悪夢以上のなにかだと思える日も、いつかは訪れるのだろう。ふるさともどった人々のすべての経験は、あれほど苦悩したあとでは、もはやこの世には神よりほかに恐れるものはないという、高い代償であがなった感慨によって完成するのだ」

これはすごい文章だと思います。フランクルはこれを彼が解放されてほぼ 1 年たった 1946 年、彼の 36 歳の時に書いたのです。強制収容所での様々な経験を 9 昼夜の間に書き記し、それが終わるころには彼のすべての経験が完成したことを見届けているのです。完成したことを見届けるということは、それをもう必要以上に引きずることはできないことを知ることです。それを片づけたということです。改めて片づけることは必要ないということです。

我々は特にこの引用の最後の文の一部分、「あれほど苦悩したあとでは、もはやこの世には神よりほかに恐れるものはない」に注意してみよう。普通の論理でいきますと、「あれほど苦悩したあとでは、神が存在するという信仰は無効宣言に値する」ということになるかもしれません。強制収容所が存在し、その中で 6 百万人の生命が破壊されたという事実は神への信仰をも破壊してしまうものだったと。ある者たちは実際、神への信仰なしに生き続ける決心をしたといいます。アウシュヴィッツ以後は神を語ることはできないと。さらにまた少なからぬ人々は故郷への生還後に命を絶ちました。あれほどのことを体験し、苦しんだ後では、もはやこの世の中には生きていけない、と。フランクルはこのように言うかわりに、「あれほど苦悩した後では、もはやこの世には神よりほかに恐れるものはない」と考えた。人間のしたこと、人間がこれからするだろうこと、それは彼をいかなる意味でも潰すことはできない。自分は人間によって引き起こされた苦悩を味わうことによって、それを突き抜けてしまった。そこには恐ろしいことは何もない。真に恐るべきは、人間にあれほど巨大な罪責を許すことによって人間を審判する神ご自身だ。フランクルはこのように考えたのだった。真に恐るべきはあの出来事の前も、その時にも神様だけだったし、あの出来事の後であるいまも神様だけなのだ。

3 章 ユダヤ教と宗教多元主義

うえに見たように、フランクルは神への信仰を告白することによって『心理学者、強制収容所を体験する』を閉じたが、このことの意味をもうすこし考えてみよう。本の第三部「収

容所から解放されて」は前半と後半という 2つの部分に分かれる。前半は解放直後の描写で始まる。被収容者は解放をどのようなプロセスを通して消化したのだろうか？彼らは解放される直前、「極度の緊張の数日」を過ごした。その後、収容所のゲートに白旗が翻り、彼らは解放された。その後、「完全な精神の弛緩」が彼らを襲った。収容所から外へ出ていき自由へと踏み出したが、自由であることの実感が掴めなかった。その言葉は霧散してしまった。彼らは強度の離人症状態を経験した。すべては非現実的で、不確かで、ただ夢のように感じられた。いまのこの自由は、はたしてほんとうに現実なのだろうか？体の方は精神ほどに縛られてはいなかった。彼らは収容所近くの親切な農家に招かれることがあったが、彼らはががつと貪り食った。彼らは何時間も、何日も食べた。そしてコーヒーを飲んでからようやく舌が滑らかになり、そして語り始めるのだった。何時間も彼らの物語を話し続けた。彼らは何年間ものあいだ重くのしかかっていた抑圧から解放されたのであり、彼らは「まるで心理的強迫であるかのよう」に語らずにはおられなかった。数日が経過し、さらに何日も過ぎて、舌がほぐれるだけでなく、内面で何かが起こる。突然、それまで感情を堰き止めていた柵を突き破って、感情がほとぼしるのだった。このようなプロセスを通して解放された被収容者たちは再び経験する現実の中に入っていくことを習った。 فرانクルはいう、

「解放後、何日か経ったある日、あなたは広い耕作地を超え花の咲き乱れる野原を突っ切って、収容所から数キロ離れた小さな町まで歩いていく。あなたは雲雀が上がり、空高く飛びながら歌う賛歌が、歓喜の歌が空いちめん響きわたるのを聞く。見渡す限り、人っ子ひとりいない。あなたを取り巻くのは、広大な天と地と雲雀の歓喜の鳴き声だけ、自由な空間だけだ。あなたはこの自由な空間に歩を運ぶことをふとやめ、立ち止まる。あたりをくると見まわし、頭上を見上げ、そしてがっくりと膝をつくのだ。この瞬間、あなたはわれを忘れ、世界を忘れる。たったひとつの言葉が頭の中に響く。『この狭きよりわれ主を呼べり。主は自由なる広がりななか、われに答えたまえり』」と。

フランクルは突然自分が天の下、地の上に他の諸々のものが満たす「自由な空間」を発見した。他のものたちと同じ存在者の 1つとして、他のものたちに囲まれ、他のものたちに関わる存在として自分を捉え、そのようなものとしての自分を受け取ることができた。宇宙を構成する要素としての広大な自由な空間の中にいる自分を実感できた。このことはとりもなおさず、自分を宇宙の創造者としての神の中にいるものとして、そして自分を彼の答えを聞くものとして理解することに他ならなかった。そのようなものとして彼は自由を取り戻した。フランクルはこの新しい人生の現実に入る瞬間を、彼が「ふたたび人間になった」瞬間として理解した。フランクルは主に、つまり神にこのことを可能にしてくれたことを感謝し、神を賛美した。

うへの引用の中でフランクルが引用するのは旧約聖書に収められている詩篇 118 の 5 節の言葉です。詩篇というのは 150 個の、比較的長い祈りを集めた本で、ユダヤ人はそれ

を大事にします。朝それを歌い 1 日をはじめ、夕べにそれをうたって 1 日を閉じるという
ようなことをしています。フランクもこの本を使って祈ったと聞いています。フィンラ
ンドでロゴセラピー研究所を運営するリストー・ヌルメラという教授はフランクが彼の
著書の中にいくつの旧約聖書の言葉を引用したかを調べたそうです。その結果、フラン
クが旧約聖書から 46 個の言葉を引用したことが分かったということです。そのうち 16 個は
詩篇からの言葉であり、そのなかの実に 12 個は、うえに言及された詩篇 118 のように、神
が人間を救ってくれたことに対する感謝の祈りだとのこと。新訳聖書からの引用は全
部で 6 個、いずれも表面的な引用だとのこと。このことからフランクはユダヤ教を
基盤としながら強制収容所からの解放と、それに対する神への賛美を描いたことがわか
ります。さらにフランクの使う責任、創造価値、体験価値、態度価値という概念、また苦
悩の理解などはすべてユダヤ人の宗教書『タルムード』との影響を受けていることも分か
っています。このようなことから、フランクが「…もはやこの世には神よりほかに
恐れるものはない…」というとき、ここでいわれる神はユダヤ教徒が賛美の祈りを捧げる
神であるといえます。

なぜこのようにフランクが神を語る仕方にこだわるかといいますと、心理療法家は
普通、神あるいは宗教を語らないという暗黙の了解があるからです。フロイトはフラン
クの青年時代の教師でしたが、神や宗教や意味や価値を語らないことを彼の功績と考
えました。すべてそれらのものは幻想であるとして否定しました。フランクはこれに
対して、上述のように宗教を、そして神を語りました。そのような語りそのものは
フランク自身にとってももちろん心理療法ではありません。ただ、彼は人間の存在を
総体として理解しようと思えば、人間の神への関係を度外視できないと考えていま
した。

フランクは 1984 年 8 月、ピンチャス・ラピーデ (1922~1997) というユダヤ教宗
教哲学者と「神の探求と意味への問い」というタイトルのもとで対話しました。その
中でラピーデは我々がすでに見た『心理学者、強制収容所を体験する』の末尾の文を
フランクに想起させました、「…あれほど苦悩した後では、もはやこの世には神より
ほかに恐るべきものはない…」そして、フランクにこの文の中の神はどのような神
なのかと尋ねました。フランクは答えました、「宗教が問題なのです。そして宗教的
人間は、彼が宗教的に語る時、神に向かいます。それ以外の誰に向かうべきなの
だろうか？」と。彼は続けます、「私は最近ある神の機能的定義づけへと前進して
います。あなたは機能的定義づけというものを知っていますか？そのようなものは、
たとえば知能指数の測定に際して私たちに会います。知性はこのテストによって測
られます。つまり、あなたは知性とは何かを実際いうことはできません — それは
非常に難しい。あなたはつぎのことに同意しなければなりません。いま具体的
なテストで測られるもの、それは機能的な定義づけです。これを神に関わらせると、
私は 15 歳の時、内面的に次のように定義づけました。神は我々の最も親密な自己
対話の相手です、と。この自己対話は本当に自己対話なのか、それとも本来、ある
他者、「まったくの他者」との 2 人の対話なのか？この問いへの答えは未決のまま
です」

と。親密な自己自身との対話があります。その時私は私自身と話をします。正直で、本当の自分が自分と対話する。両方の自分にいかなる嘘も交わらない。その場合自分が開かれている対話相手の自分を「まったくの他者」あるいは神と違って差し支えないかもしれない。 فرانクルはこのように考えることは可能かもしれないというのです。このように考えることができれば、ユダヤ教徒であることと、それ以外の宗教、世界および人間観を代表する者たちとの橋渡しがあることになる、このようにフランクルは考えます。そうするとユダヤ人の伝統の中から出てきたロゴセラピーは排他的な意味でユダヤ教的な心理療法ではなくて、宗教横断的に適用可能な心理療法となるだろうと。

4章 ロゴセラピーと宗教

フランクルは彼の同朋のみならず、キリスト教の神学者や聖職者にも刺激を与えました。すでにフィンランドのエヌメラ教授に言及しましたが、今から44年前、アメリカのロバート C. レスリーという当時カリフォルニア州 バークレーにあるパシフィック神学校の教授は『イエスとロゴセラピー』という本を書きました。これは1978年、^{ぼんざい}萬代慎逸教授によって日本語に訳され、我が国にも広まりました。レスリー教授はロゴセラピーの考え方がキリスト教の聖典である新訳聖書の中にも見出されるとしました。そこにはフランクルのロゴセラピーに固有な概念がすべて言語化されているというのです。この連続講義の中でしばしば触れた人間の自由と責任、創造価値や体験価値や態度価値の実現、価値の矛盾の解決、実存的空虚の克服、ライフワークの実現などです。フランクルのロゴセラピーはフロイトやユングの深層心理学に対して「高層心理学」と呼ばれますが、新訳聖書はレスリーによるとこれも支持します。皆さんの中には新訳聖書をこれまで手に取られた方はあまりおられないかもしれませんが、ここではレスリーの触れている聖書のテキストを1つだけ紹介したいと思います。

第1講義において私は、『心理学者、強制収容所を体験する』という本において「人間の精神の反抗力」が問題になっているといたしました。フランクルはこの本に「…それでも人生に然りをいう」というタイトルを与えたのですが、彼はこの「それでも」という小さな言葉の中に「人間の精神の反抗力」が言い表されていると考えたのでした。レスリーもまたルカによる福音書から「孤独なザアカイ」という物語を引用しながらそれを問題にしています。聖書の箇所を読みます。

さて、イエスはエリコにはいて、その町をお通りになった。ところが、そこにザアカイという名の人がいた。この人は取税人のかしらで、金持であった。彼は、イエスがどんな人か見たいと思っていたが、背が低かったので、群衆にさえぎられて見るができなかった。それでイエスを見るために、前の方に走って行って、いちじく桑の木に登った。そこをとられるところだったからである。イエスは、その場所にこられたとき、上を見上げて言われた、「ザアカイよ、急いでおりてきなさい。きょう、あなたの家に泊まることにしているから」。そこでザアカイは急いでおりてきて、よろこんでイエスを迎え入れた。人々はみな、これを見てつぶやき、「彼は罪びとの家に入って客となった」といった。ザアカイは立って主にい

った、「主よ、私は誓って自分の財産の半分を貧民に施します。また、もしだれかから不正な取り立てをしていましたら、それを4倍にして返します。イエスは彼にいわれた、「きょう、救いがこの家に来た。この人もアブラハムの子なのだから。人の子が来たのは失われたものを訪ね出して救うためである」。(19章1節~10節)

ザアカイは税金を取り立てる仕事をしていた。イエスの時代ユダヤ人はローマ人の支配されており、ザアカイはローマ人のために同朋から法外な税金を取り立てた。そのうえ自分が着服する分も取り立てていた。彼は金持ちになったが、その分だけ同朋から憎まれ、孤独だった。自責の念に潰されてもいた。彼はイエスが彼の町を通りかかることを噂で聞き、彼が通る時刻をめぐめて通りに出た。イエスにひと目でも会いたい一心で、群衆の中に入っていた。しかし、彼は背が低くて人々に妨げられ、イエスを見ることはできなかった。そこで彼は「前の方に走って行って、いちじく桑の木に登った」という。自分が目立つことさえもいとわなかった。木の上に上ると不正を働く人間として自分を衆目にさらすことになった。それでもよかった。彼は絶望的な思いで木に登った。それほどイエスを見たい気持ちが働いていた。ひょっとすれば彼はいつも人々から距離を取る必要があったのかもしれない。彼は人々に拒絶され苦しんでいたのも、さらに拒絶される苦しみを味わわないで済むように人々から距離を保ったのかもしれない。きっとこの気持も働いていた。人に合わせる顔がなかった。イエスが通りかかる。ところが不思議なことが起こった。イエスはこの男を見たことがないのに、彼の名を呼ぶ。あたかもそれまで彼の知己であったかのように。イエスが、この男が木の上にいる本当の理由を見抜いたかのように、ザアカイに呼びかけていう、「急いで降りてきなさい」と。しかもいう、「今日、君の所に泊まることにしている」と。選りによってみんなから憎まれ、アウトサイダーとして生きることを余儀なくされたこの男の家に泊まると。このことがまったく当たり前のことでもあったかのように。ザアカイを見るずっと以前からイエスがこの決断を下していたかのように。ザアカイは木から降りてきて、イエスを自分の家に迎え入れた。これをみた群衆は罪びとザアカイのところに泊ったイエスを非難した。イエスにしてみればこれは全然気にするに及ばぬことだった。ここのところですね、物語のポイントは。ザアカイは変わりがかった。まっとうな人間になりたかった。ただその一心でイエスを見たかった。彼の不正、彼の罪、彼の恥にもかかわらず、否、まさにこの不正と、罪と、恥のゆえに呪われているかのような孤独で、落ち込んだ生活から抜け出したかった。この願いからいつもはしないことをしようとし、実際それをした。いつもの自分に反抗した。反抗してイエスに会おうと思った。だから木の上に登った。レスリーは書いています、

「しかしながら、ザアカイは木の上にとどまっていなかった。この出来事を中心は変化にある。何がザアカイを苦境に追いやったにしろ、彼はそこにとどまっている必要はなかった。彼の過去の人生による決定的な影響力にも関わらず、彼の未来の人生を変えることは可能であり、事実、変わったのである」と。「ザアカイでさえ変わることができた。売国

奴としてみられ、不正な裏取引に関係し、身体的にも、心理的にも、社会的にも困難に陥りながら、なお彼は変わることができたのである」。

しかし、レスリーはザアカイの物語を解釈する際、ただ単に彼が変わろうとしたし、事実変わったことに注意するばかりではありません。特に私の興味を引くのは、レスリーがイエスという方を最も理想的な心理療法家に比較していることです。ザアカイに語りかけるかけた人間がいなかったら、ザアカイが木に登るというアクションは彼の精神の反抗力をフルに発動させることはできなかった、あるいはすでに発動した反抗力を目標まで導くことはできなかった。重要なことは、イエスが彼を見つけ、彼に声をかけたからであって、レスリーはまさにこのところが物語のもう一つのポイントをなすというのです。イエスは2か所でザアカイに話しかけています。最初の言葉は「木から急いで降りてくるように」ということと「きょう、あなたの家に泊まることにしている」ということです。これに先立って、イエスはザアカイをその名でよんでいます。我々も普段経験しますが、名で呼ぶということは特別な関係を指し示しています。それは関係が親しい関係であることを示しています。親しい関係にある人間に向かって、ここに降りて来いとっています。わざわざ親しさを作り出すための手続きはここにありません。ザアカイはイエスにとって最初から親しい人間であります。そこには信頼が支配しています。その次にくる言葉は「あなたの家の泊まることにしている」。ここには信頼感の上昇が暗示されています。改めてあなたがどんな人間かを調べた上でこれからあなたの家に泊まるかとまらないかを定める、あるいはあなたがそれに同意するかしないかを確認してあなたのところの泊まるかどうかを決めようというわけではありません。イエスはザアカイを全面的に、無条件に信頼し受容しています。レスリーはこの箇所との関連でマルチン・ブーバーという現代の最も優れた哲学者のひとりの言葉を思い出しています。彼はいったという、

「患者の『あなた』がセラピストの『あなた』に意味を持って結びついた時に初めて真の治療が可能となる。…つまりセラピストの無防備の自己と、患者のありのままの自己とが出会うときにのみ真の治療がなされる」と。

したがって、ブーバーは「セラピストは必要に応じて防衛的な姿勢を捨て、思い切った自己をさらけ出す必要がある」と論じたのです。このようなブーバーの言葉はレスリーがイエスを理解するための刺激となりました。その結果、レスリーはイエスを「防衛的な姿勢を捨て」、「自分をさらけ出す」人間あるいは心理療法家として描くことになりました。「援助する人が疑いと不信の壁を破るためにどれほど自分自身を賭けなければならないかは、ザアカイの出来事の中に鮮やかに証明されている。そこに集まった人々の非難を『ものともせず』、イエスはザアカイと親しい関係を結び、彼の家の客になるのである。この率直な行動によってイエスは、権威のいかなる特権もすて、また新しくなりたいという人間としての要求と、交わりを求める精神的な要求を満たすためにザアカイを信頼するものになるのである。群衆を完全に無視して、このように能動的にそして独特な方法で、アウト

サイダーの受容をなしたのである。」このようにイエスはザアカイをあるがままの姿のみならず、彼を彼があるべき最高のものになれるかのように受容したのです。ザアカイは将来へ向かって変わる可能性を得、彼が成ることになっていた人間になることができたのです。

このようにロバート・C・レスリーはロゴセラピーがイエスと同じように人間に希望をあたえる、出口のない生活状況の中に出口を見つけさせてくれる、そこから光が差し込んでくるといったのでした。もちろん、フランクルはロゴセラピーを宗教から区別します。それは超宗教、超宗派です。ロゴセラピーには固有の領域、固有の対象、固有の課題があります。私自身もこの区別は決定的に重要だと考え、それを守っています。ただ、ロゴセラピーを一所懸命やると至るところへ道が通じていることが分かるということです。私はこの講義の冒頭で宮本武蔵に触れました。彼の著書を読みながらロゴセラピーと武士道といった話もあながち間違っていないと思うようになりました。それについてはいずれまたお話ししましょう。

おわり